

第3章 事例から学ぶ

Q1 学習不振のため不登校等になっている児童生徒で、その背景にLDまたはLDかもしれないことがある場合がありますが、その援助・指導において、そのことを踏まえる必要があるのはなぜですか。

A1 LDによる学習不振が不登校等の理由になっている場合、その障害による学習困難それ自体の改善・克服のための援助・指導が必要だからです。

学習不振による学校生活への心理的不安が、不登校等の理由である場合、その学習不振が障害によるものではない（例えば、神経症的な不登校）

障害による

の違いにより、必要な対応が異なってきます。

の場合は、心理的なアプローチが主となります。

の場合は、受容と共感(例えば「今は学校で勉強したくないのだね・・・」など)を主とする心理的アプローチだけでは不十分です。LDすなわち中枢神経系の軽度の機能障害があると、そのために学習でつまずき、心理的な不安からトラブルを起こしがちだったり、不登校等の状態になる場合もあるようです。この場合、学習困難そのものの改善や克服のための援助・指導がまず必要なのです。障害による児童生徒それぞれの認知の特徴(いわば学習や行動のスタイル)及び特異性に応じた援助・指導に留意することも大切です。

～ LDかもしれない児童生徒の学習・行動等の課題の改善・克服のための援助・指導～

特徴的な学習・行動スタイル	その理由・背景	援助・指導例
<p>予定が突然変更された場合や、友達の何気ないかわりを誤解したりすると情緒が不安定になりやすい。</p> <p>事例6 F男 事例8 H男</p>	<p>場や人間関係の認知に弱さがあるため、次の行動に見通しがもてず、失敗経験も気になり、「うまくやらなければいけない・・・」と不安になってしまう。</p>	<p>できるだけ事前に変更を知らせる。興奮時の不適切な行動を整理して返し、不安定になることを克服する柔軟さを少しずつ指導する。</p>
<p>友達と遊べない。トラブルが多い。</p> <p>事例1 A男 事例3 C子 事例5 E男 事例8 H男</p>	<p>聴覚認知の弱さのため、言葉を聞き違えたり意味を取り違えたりして、他者との間合いや気持ちの読み取りがうまくいかない。</p>	<p>別室登校を活用し、ロールプレイングによるコミュニケーション理解と、そのトレーニングを行う。</p>
<p>言語よりも数量に関する学習の方が比較的意欲がある。</p> <p>事例1 A男</p>	<p>言語発達の遅れ(軽度の構音未熟)</p>	<p>別室登校を活用し、計算ソフトを使ったゲーム的学習により意欲を強める。絵の入ったプリントを使う。</p>